

巻頭言

日本アプライド・セラピューティクス学会会長 緒方宏泰

2009年4月25日、日本アプライド・セラピューティクス学会が設立された。治療に用いる医薬品の選択を科学的、合理的、経済的な視点で進めなければならない、そのような思いから学会は設立された。この数年、医療費は30兆円を越えてきている。一方、今年の税収入が37兆円にまで落ちる見通しと報道させている。事実上、税収の殆ど全てを医療費で使うまでに至っている状況を改めて認識せざるを得ない。この点からも、我が国の医療体制が瀕死の状態に到達してしまっていることは明らかであるにも関わらず、未だに、改革の歩みは弱いと感じざるを得ない。

「事業仕分け」が話題になっている。無駄がないのか、予算要求額に対する切り込みが試みられている。削減される対象になった事業に関しては、今後、いろいろなことが滞るとの不安や批判が噴出してきている。しかし、減額にたいし、実施できなくなるとの瞬間的な反発では、何らの前進的な結果を生まないのではないか。事業の削減ではなく、予算の使い方における無駄の指摘であるならば、その点の反省、改革によって、効率よい執行に向けた展開を考えるべきであろう。従来、無駄なく、全額、妥当に予算が執行されてきたとは到底、思えないからである。自ら、しっかりとした評価を行い、自律的に妥当な執行ができる自己の確立が、社会のあらゆる面で求められていると感じられる。

医療費、薬剤費はどうなのか。まさに、私たちが学会の設立時に指摘したように、経験的な薬物治療に依存することなく、薬物治療に関して調査、評価、研究などを行い、新たなエビデンスを蓄積し、安心、安全かつ良質な薬物治療を議論、提案していくことを強く求めなければならない状況であると私たちは認識している。科学的で、合理的・経済的な薬物治療を行える能力、視点を社会の中に早急に確立し、無駄を削減し、経済的で有効、安全な薬物治療の実行を切実に求める患者の期待に応える力を建設していくことが求められている。

「アプライド・セラピューティクス」誌が、日本アプライド・セラピューティクス学会の目的に沿って、医療用医薬品、一般用医薬品のみならず、いわゆるサプリメントなどの補助的非薬物治療も含め、広く薬物治療が科学的で合理的、経済的に、エビデンスに基づいて行われることを目指す医師、薬剤師などの活動の研究活動を高め、経験交流、情報交換の場として有効に活用されることを期待したい。

2009年12月